

藤沢周平と庄内

第三回 「花のあと」を訪ねて

荘銀総合研究所
研究員
佐藤 寛子

「昭和二十四年の春に、私は生まれた村と山ひとつへだてたところにある温泉のある村に、教師として赴任した。念願の村の子供の先生になったのである。背広というものを持たず、詰襟つめえりの学生服を着て、自転車で生家から学校まで通った」
（藤沢周平著『ふるさとへ廻る六部は』）

「隣村とは言うものの、中学校がある湯田川村は私の村の西にひろがる懐のふかい丘陵にへだてられた、私には未知の土地だった。私の村では朝は真東にそびえる月山がっさんの上から一日の日が差しはじめ、日暮れになると、日は西にひろがる低い丘陵地帯の向こうに沈んだ。東側の村村は終日あきらかに見えていたが、丘の陰にある西側の村村は片鱗も見ることが出来なかった。教師になって赴任してはじめて、私はいつも日が暮れる丘のむこうにある村を見たのである」
（藤沢周平著『半生の記』）

金峯山きんぽうさんの麓ふもとに湯田川という温泉郷がある。古くから、鶴岡の奥座敷と呼ばれ、藩政時代には藩主や姫君がおしのびで湯治に訪れたと言われている。鶴岡の市街地から南西の方向へ、つづら折りになった街道を抜けて、左手に松尾芭蕉が「めずらしや山を出羽いではの初茄子はつなすび」と詠んだ、緑の広がる民田みんでんを過ぎたところに、静謐せいひつなたたずまいを見つめる。

開湯千三百年という伝統の中で、湯宿の黒塀は深みを増して、その歴史が息づいている。幕末に、庄内藩おかかえの新徴組が傷を癒いしたのもここ湯田川温泉である。

東側の丘陵に広大な敷地を構える梅林公園、やわらかな光のこぼれる竹林。市街地の喧騒けんそうとは打って変わって、緑の葉音が聞こえてきそうな穏やかな時が流れている。

この情景に魅せられて、多くの文人墨客が湯田川をおとずれた。

竹久夢二、種田山頭火、古川古松軒、中村光夫、柳田国男、横光利一、そして藤沢周平。

藤沢周平はここからほど遠くない黄金村高坂こがねむらという地区に生まれている。

現在、黄金村は鶴岡市に編入され、生家も跡をとどめるのみになってしまったけれど、勤務した中学校（現在の湯田川小学校）、幼い頃に仰いだ月山の眺め、多くの藤沢周平の世界の面影を見つけることが出来る。

郷里のことはさまざまな形で作品やエッセーに描かれているが、湯田川に藤沢周平が懇意こんいにしていた九兵衛旅館という宿がある。おかみである大滝澄子さんは、藤沢周平が新卒の教師として中学へ赴任したときの教え子である。さっそくお話を伺いに、湯田川温泉へ向かった。作家藤沢周平が誕生する以前の「小菅留治（藤沢周平の本名）の素顔を語っていただいた。

率直に質問しますが、藤沢周平さんはどんな方でしたか。

とても優しく、さわやかな印象の方でした。

自分には厳しい方だったと思いますけど、それを表に出すということとはあまりなかったような気がします。

いろいろご苦労なさったのでしょうか。

あのころ、まだ戦争が終ってまもなくでしたので、女の先生か、お年を召された男の先生が多く、担任もしょっちゅう変わっていましたが、戦後の教育制度のごたごたの中で、私たちが新制中学にあがると同時にやって来られたのが小菅先生だったんです。

若くてハンサムな先生だったので、生徒が騒いだというふうなことを後日談として聞いたことがあります。

そんなことないです（笑）ハンサムねえ……

みんな確かに憧れてはいたのですけど、この辺の人は昔から奥手でしょ。

本当に生徒から好かれる良い先生でした。

先生はあのころから漢文とか音楽に詳しくて、田圃や山で遊んではかりだった私たちに、新しい世界をいろいろ教えてくれました。

綺麗な音楽を聞かせてくれたのも先生が初めてでした。クラシック音楽や、それからベルレーヌの詩、教室の壁にもいろいろなポスターを書いて張ってくれて、私たち生徒の世界に新風を吹き込んでくれました。

私たちの教室は一階の道路側に面していて、クリスマススの日、下山先生という、もう一人の先生といっしょになってサンタクロースに仮装して窓から入ってきて、プレゼントをくださいました。

贈り物はたしか、鉛筆と消しゴムだったと思います。

教室を綺麗に飾り付けて、みんなが芸を披露して、とても楽しかったです。今でも覚えています。

そんな小菅先生が「暗殺の年輪」で直木賞を受賞されて以降、意欲的に作品を発表しつづけ、時代小説に新風を吹きこむ作家となられたわけです。

教え子の方は本当に驚かれたと思いますが、有名になられてからもよく九兵衛旅館に足をお運びになったそうですね。

はい。お部屋も湯から遠くなく、尋ねてこられた方が面会しやすいように比較的入り口の方にとっておりました。（二階に周平さんが滞在された部屋が保存されており、宿泊も可能）

湯田川出身の同級生で年に一度先生を囲んで同級会をしております、体調を崩されてからあまり外出はなさらなかったそうですね、その会合には必ず出席してくださっていました。

そしてお泊まりになると、先生は奥様に電話していらしたのでしょ、うか、「はいま立派になってね、は……だったよ」と生徒の近況を話題になさっているんです。

先生は作家になられても、生活の中に私たち生徒のことを頻りに会話に出されているようで、一度練馬のお宅に伺った時、奥様に「あら、澄子ちゃん」と言われたのには驚きました。

有名になってもみんなの先生でした。

九兵衛旅館のロビーには藤沢周平直筆の手紙や、色紙、写真などが飾つてある。春の、この季節になると名物の孟宗料理を味わいに、多くの方が庄内を訪れるけど、少し足をのばして周平先生の世界に触れて欲しいですねと、大滝さんはほほ笑んでおられた。

そして、湯田川温泉は昔から美人の湯って言われているの。本当に肌が白く綺麗になるから、是非入っていらして、と帰り際に頂戴した言葉がなんと魅力的に響いた。

湯田川からほど近い場所に、藤沢という青田の美しい地区がある。ペンネーム「藤沢」もこの土地に由来すると、エッセーの中で明らかにされている。

藤沢は若くして亡くなられた前の奥様の、生まれ育った場所である。「胸もつぶれるような光景と時間を共有した人間に、この先どのようなぞみも再生もあるとは思えなかったのである。」

しかし胸の内にある人の世の不公平に対する憤怒、妻の命を救えなかった無念の気持は、どこかに吐き出さねばならないものだった。私は一番手近な懸賞小説に応募をはじめた。そしておそらくはそのことと年月による感謝が、私を少しずつ立ち直らせて行ったに違いない。

(藤沢周平著「半生の記」)

藤沢、湯田川、小真木原、旧黄金村の周囲は、藤沢周平にとって懐かしい思い出が詰まった場所である。郷里に寄せて書いた数々のエッセーの中に、その原風景を見つける。

教え子たちへのメッセージ・言葉・食・遊び・風土、郷里の風景をとらえる時の筆致は、慈しみの気持に溢れている。

国を憂いたり、歴史を俯瞰するようなことはほとんど書かなかったけれど、人間が悩み、迷いの中でも生きていこうとする姿を正面からとらえ、数々の作品を郷里を舞台として発表した人であった。

花も人間と同様に、自然という循環のなかのたった一瞬の現象に過ぎないのに、私たちは格別の思いで花を愛でる。

自分の気持を花に託し、行く末の知れない運命を花の言葉にたとえるように、限りある命を惜しむ。

儂さを愛おしく思い、その姿は深くこころに刻まれる。

封建時代の哀れな境遇のなかでも、凜と生きていこうとした女性の真の美しさを「花のあと」はとらえている。

春は開けて、美しい情景のなかにたえず夢想するのは、生涯貫き通された、藤沢周平の柔らかな姿勢である。

他の歴史作家と呼ばれた人に比べて、温もりすら感じるほどに、その色彩は淡い。

人々の迷い、息づかい、涙、作品を通して藤沢周平の世界に触れた時、それが悲しい結末に終わることも、みずみずしい気持で満たされていくことに気が付くであろう。

心のわだかまりが散り、解き放たれていくように、余韻を帯びて、作品は静かに幕を閉じる。

「花のあと」という珠玉の作品がある。

咲く花のいろに重なるように、故郷の風景をとらえるときの作風は唯一無二の美しさがあり、大切な人と過ごしたであろう時間の重さが満ちている。

そこに、懐かしい日々への郷愁を見ることがある。

湯田川を背景に書かれた作品の水底には、戻ることのできない日々への哀切が漂い、作家の姿と、不遇の境地に身を委ねることしかできなかった主人公の境遇が、いつしか重なる。

早春から晩秋まで咲きほころぶ花に彩られる土地を舞台に、美しい盛りを、剣の道に生きた娘の恋の記憶が、柔らかな方言によって綴られていく。

「水面にかぶさるようにのびているたっぷりした花に、傾いた日射がさしかけている。その花を、水面にくだける反射光が裏側からも照らしているので、花は光の渦にもまれるように、まぶしく照りかがやいていた。豪奢で、豪奢がきわまってむしろはかなげにも見える眺めだった。」

(藤沢周平著「花のあと」)

いま、勤務した校舎の片隅にはひっそりと、藤沢周平を偲ぶ碑が建てられている。

冒頭に掲げた「半生の記」から抜粋された

「赴任してはじめて、

私はいつも日が暮れる丘のむこうにある村を見たのである。」

の一節が、そこに刻まれている。

当初、藤沢周平は記念碑の建立を見合わせて欲しいと言ったそうだが、教え子たちがどついても、とお願いするので、目立たない小さなものなら良いとしぶしぶ承諾した、とのことであった。

字体は直筆の原稿を複写したもので、丸みをおびたなんとも優しい印象である。

桜前線が北上し、遅くとも四月の下旬には、藤沢周平の故郷も花のいろに染め上げられていく。

山懐に瀧のように漂う花の姿は、年を追うごとに心に沁み入る。文壇に登場してから僅か二十六年の間で、実に多くの作品を世に送り出した人であったが、この湯田川を舞台に描かれた「花のあと」ほど胸に響く作品はない。

春爛漫の美しさは、いよいよ故郷を満たしていく。

(写真提供・鶴岡市観光物産課)